久昌寺涅槃托鉢（三十六）

平成三十年三月

今年も涅槃托鉢。春もすぐそこ。鈴を鳴らし、読経しながら、弟子と共に一軒一軒廻っての托鉢修行。私共もあなた様も共々に修行です。浄財のご喜捨があると、「財法二施　功徳無量　檀波羅蜜　具足円満」と唱え、深々と問訊。この托鉢のチラシ、ご一読下さい。生きる上でのご参考になれば、ありがたい。

二月五日、加茂暁星高校で「涅槃会」の講話《演題は〝暁の星〟～自分を信じて、努力していく》を約三十分させていただきました。講話の前に十分間の静座、一，二年生約三六〇名、暖房のない体育館の床に運動靴を脱いで座る。姿勢はお世辞でもよいとはいえないが、みな黙って実行していました。

今から二十九年前の二月六日にも講話をさせていただいた。変わりない体育館の様子、子供たちのエネルギーを肌で感じながらの講話、二十九年の歳月が流れ、変わったのは私。

子供たちに少しでもお役に立つようなお話ができればと、三つのポイントに絞りました。

①「あなたの中に信ずるに足るものがある。それを自覚しなさい。」

「幸不幸のカギは自分の周囲や環境の中にあるのではない。」

この世で自らを島とし、自らをたよりとして、他人をたよりとせず、法を島とし、法をよりどころとして、他のものをよりどころとせずにあれ。

（二－二六）

②「怠けるな。人間は怠けたいから、釈尊は怠けるなと最期のことばを伝えた。」

「私（ブッダ）の葬儀にかかわるな、正しい目的のために、努力し実行しなさい。正しい目的に向かって怠らず、つとめ専念しなさい」

「さあ、修行僧たちよ。お前たちに告げよう、『もろもろの事象は過ぎ去るものである。怠ることなく修行を完成なさい』と。」

これが修行をつづけて来た者の最後のことばであった。（六－七）

（『ブッダ最後の旅』中村　元訳　岩波文庫）

③「他に思いをめぐらす」

「いかなる方向に思いをはせてみても、自分より愛しいものを見出すことはない。同様に、他の人々にとっても、それぞれの自分がとても愛しい。だからこそ、自己を愛する人は他人を傷つけてはならない。」

（『相応部経典』三・八）

本当に自分を愛する人は、自分以外のすべて、人も物もすべてを愛おしみ大切にして、傷つけたり、見下したり、いじめたり、粗末に扱ったりしてはならない。

静座の後、『四弘誓願文』が流れてきました。最初の第一句「衆生無辺誓願度」生きとし生けるもののお役に立つ、という意味です。一月十一日大雪の夜、新潟からの電車の中でトイレに行きたくなり、ドアの前に立ちドアを手であけようとするがあけられず、困っていたその時、男子高校生がすぐに気づき、「開」のボタンを押してあけてくれました。ニコッと笑ったその笑顔が素敵でした。

成績や能力やスポーツや身体的なことなど人より劣っていても、それは問題ない。「いま、ここに人間として生きている」、そのことが最も尊い感謝すべきすばらしいことである。

※三月十五日（木）午前十一時より、ねはん会・お話・おとき　どうぞおまいり下さい

涅槃の図　みな泣いていて　あたたかし　【久昌寺坐禅会】毎週土曜日　夜七時～九時　どなたでも